〔『晉書』王徽之傳〕

嘗寄居空宅中、便令種竹、或問其故、但嘯咏指竹曰、何可一日無此之君

▼『枕草子』「五月ばかり、月もなう、いと暗きに」（第百三十段）にこの故事を踏まえた次の一文を見出すことが出来る。

五月ばかり、月もなう、いと暗きに、「女房やさぶらひたまふ」と声々していへば、「出でて見よ。例ならずいふは、誰ぞとよ」と仰せらるれば、「こは誰ぞ。いとおどろおどろしう、きはやかなるは」といふ。ものはいはで、御簾をもたげて、そよろとさし入るる、呉竹なりけり。「おい。此の君にこそ」といひたるをききて「いざいざ、これまづ、殿上にいきて語らむ」とて式部卿の宮の源中将・六位どもなど、ありけるは去ぬ。頭弁は、とまりたまへり。

（新潮古典集成『枕草子上』萩谷朴校注）（傍線筆者）

▼『本朝文粋』巻第十一に「321 冬夜守庚申、同賦修竹冬青応数藤篤茂」に「晋騎兵参軍王子猷、種而称此君、唐太子賓客白樂天、愛而為我友」の句が見える。この句は次の『和漢朗詠集』にも載せる。

▼『和漢朗詠集』巻下「竹」

晋の騎兵参軍王子猷　栽ゑて此の君と称す

唐の太子賓客白楽天　愛して吾が友と為す